

留学報告書 ～もうひとつの居場所～

アルムスリム大学
国際文化学部生（中期）

私は、2023年8月18日～2024年2月10日の約6ヶ月間インドネシア、アチェ州に中期留学をしていました。この6ヶ月間は私の人生にとってとても大きな財産になりました。行ったことのない国、地域で半年過ごすこと、日本ではほとんど感じることはないイスラムの文化の中で生活すること、インドネシア語で会話をする、留学前は不安なことばかりでしたが、その分毎日が刺激に溢れていて、吸収することがたくさんありました。今は、心からインドネシアを選んで良かったと思っています。

～授業について～

月から金、毎日一コマから二コマの授業を受けていました。私たちが参加する授業には、私たち以外の学生もたくさんいました。授業は主にインドネシア語で行われ、英語が話せる先生は、英語でも説明してくれました。また、英語が話せない先生に関しては、翻訳をしてくれるなど私たちも理解できるように工夫してくれたのでとても受けやすかったです。そして、日本の授業と違う点は、先生と学生とでのディスカッションが多いところです。先生が言ったことに対して自分の意見を自由に発言しています。ディスカッションすることで授業の理解度も深まるので、積極的に自分の意見を言えるところはとてもいい文化だと思いました。

また、もう一つ日本の授業と違う点は、定刻に授業が始まることがまずないところです。授業の開始時刻になっても大抵先生は来ず、学生も来ません。10分ほど経つとだんだん人が集まってきます。また、大幅に遅刻する学生も少なくありません。日本よりも時間に対してルーズなところがこの文化だと思い、逆にそれも楽しんでいます。また、授業は教室だけでなくカフェテリアでコーヒーを飲みながら受けることもあるほどゆったりとした学校生活でした。



～授業以外の活動について～

アチェにいた期間は、授業以外の活動をたくさんしました。その中でも特に印象的だったものを五つ紹介します。

まず一つ目は、International Conference “Miceshi 2023”です。10月11日に同じ学部の人たち数人と International Conference “Miceshi 2023”に参加しました。このイベントは、自分で研究テーマを決めてそれについて調べ、プレゼンテーションをするというイベントでした。しかし、目の前のオーディエンスに加え、zoomで世界各国の参加者と繋いで行っていた大きなイベントだったので、今まで私が経験してきたプレゼンテーションの中でも1番規模の大きいものでした。私たちは3人グループでプレゼンテーションを行

い、「南極大陸における植物の開花現象」について発表しました。他のプレゼンターの方たちは、教育プログラムについて、インドネシアのジェンダー問題について、また、アチュの歴史などについて発表していました。自分自身、このような大きなイベントに参加するのは初めてでとても緊張しましたが、プレゼンテーションの準備をする段階や調べる段階、また、他のプレゼンターの発表を聞く中で今までにない新しい刺激をたくさん受けることができました。



二つ目は、Model United Nation です。11月23日に国際関係学部の学生と Model United Nation をやりました。Model United Nation とは、その名の通り模擬国連で、学生がそれぞれ担当の国についてこの問題におけるその国の立場(同盟国や貿易国、宗教的立場など)を調べ、国連の場で話し合うというものです。議題は、“Palestinian Genocide: Neglected Humanitarian Issues and Human Rights Dilemmas” で、26 カ国が参加しました。私たちはそのまま日本として参加し、日本の意見を述べました。まず、全部の参加国が1分間で自分の立場や意見を述べます。その後に当事国であるパレスチナとイスラエルが登壇に上がり意見を述べます。そしてそこでの発言や自分の立場を踏まえて全員で話し合いをして、最終的にどちらにより賛成できるか、また、国際連合としてどのような対応をするべきかを決めました。

今回議題になったパレスチナとイスラエルの問題は、正直、日本人はインドネシア人よりも問題意識が低いうえに曖昧な立場をとっています。私も最初はそうでした。しかし、この模擬国連が行われたことによって、この問題における日本の意見や立場についてとても深く調べました。そうしたことで、なぜ日本人はインドネシア人よりも問題意識が低いのか、なぜ日本は曖昧な立場をとっているように見えるのかが分かりました。

このように、他国を担当した人たちもそれぞれその国について深く調べ、今まで抱いていた先入観も含め一つ一つの行動や言動にどのような意味が込められているのかを学ぶことができました。しかしその一方で、なぜこの問題が未だ解決できないのかという問題解決の難しさも様々な国の立場を聞いてとてもよく分かりました。私は初めてこのような模擬国連に参加し、日本の立場について調べましたが、あえて反対意見にある国について調べその立場から問題を考えることこそ、このイベントの本質ではないかなと思いました。



三つ目は、幼稚園訪問です。教育学部の友達の紹介から、幼稚園に行きました。その幼稚園では、小学校に入る前に少し勉強するような感じで英語の歌を体を動かしながら歌ったり、お昼ご飯を食べる前にちゃんと手を洗うことやイスラムの食べる前のお祈りを勉強したりしていました。その日は、私が日本語の1～10の数字を教えたり、「ありがとう」の意味を教えたりしました。子どもたちはすごく元気に楽しんで日本語を勉強してくれたので私もとても元気をもらえました。



四つ目は、“PASKA Aceh”という団体の活動について勉強しに行ったことです。この団体は、アチェにおける紛争の犠牲者、その家族を対象に復興支援を行っている団体です。同じ国際関係学部の生徒と一緒にいき、生徒たちはそこで自分たちで調べたアチェの復興の現状などをプレゼンテーションしていました。また、実際活動をしている方たちのお話も聞きました。アチェで起こった心痛い出来事も、しっかりと次の世代に伝えていかなければ平和への願いが薄れていってしまう。そうならないためにもこの団体は生存者の体験談や記録などを伝える活動や、被害者コミュニティを作り様々な方法で癒しを求めてきました。また、家族や夫を亡くした女性たちが働けるための支援も行っていました。ガーデンを作り、花を販売したり、スパイスなどの食料用調味料を作り販売したりするなど、女性が自立し働き、生活していけるためのサポートをしています。今回私たちが訪れ学んだように、紛争を知らない世代にいかに平和の大切さを繋いでいけるかがとても重要だと改めて理解できました。



五つ目は、海軍の施設、軍艦見学です。このイベントでは、国際関係学部の学生とアチェの海軍について学びに行きました。まずは海軍の施設に行き、この地域の海軍が普段何をしているかについて聞きました。現在は、ロヒンギヤの問題が大きくなっているため、ロヒンギヤに対しての活動についてや、また、地域の団体と協力をして行っている浜辺のクリーン活動について、日々の訓練の様子についての話を聞きました。そして、お話の後は、実際に使われている海軍の軍艦を見に行きました。船の中に入り、操縦席から燃料タンク、寝泊まりする場所、キッチンなど、全て説明を聞きながら見学することができました。今も実際にロヒンギヤを取り締まるために使われているとのことでした。日本にいてもなかなか海軍の軍艦の中に入り見学することはないので、とても勉強になりました。



-友達-

友達とは、授業以外でもカフェテリアで一緒に過ごしたり、休みの日に遊びに行ったりするなどたくさん関わっていました。授業が終わった後はカフェテリアに行きお昼ご飯を食べるのが日課で、ご飯の後はみんなでUNOをやったり音楽を流したりしながらのんびりと過ごしていました。また、私が滞在していた地域は、名古屋のようなレジャー施設はなく、カフェか海、または、街にある小さなショッピングモールがあるくらいでした。そのため、友達とのお出かけはおしゃれなカフェに行くことが多かったです。アチェはコーヒーが有名でとても美味しいので、いろんなカフェのコーヒーをたくさん楽しみました。



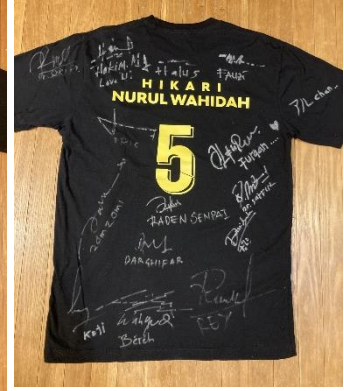
-生活面-

生活面は、自分が不安に思っていたよりも快適で困ることはなかったです。ゲストハウスの自分の部屋のトイレは洋式で、シャワーもお湯が出ました。水は硬水なので基本的には買った水しか飲めませんが、ゲストハウスにはウォーターサーバーがあり、そこから水を飲めたので特に飲み水に関しても困ることはありませんでした。また、ゲストハウスには常に誰かがいたので安全面もあまり心配することはありませんでした。



-フットサル-

毎週金曜日の夕方5時から大学のOBや先生方と一緒にフットサルをしていました。私はフットサル未経験でしたが、快く受け入れてくれ毎週楽しくプレーできました。フットサルをやっていたおかげでアルムスリム大学の先生方とも仲良くなり、学校のカフェテリアで会った時なども楽しく話せました。帰国する前にはアルムスリム大学フットサルチームのTシャツにみんなのサインを書いてサプライズでプレゼントしてくれました。Tシャツの後ろには私の名前も入れてくれたので最高の思い出になりました。私はフットサルチームにみんなの似顔絵を描いたサッカーボールをプレゼントしました。とても喜んでもらったので私も嬉しかったです。



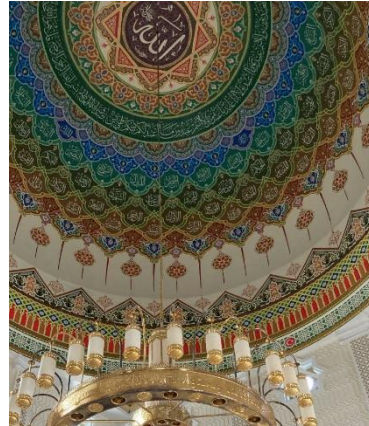
-イスラム文化-

アチェ州は、インドネシアの中でもイスラムが濃い地域なため、留学に行く前はどんな生活になるのか想像が付きませんでした。最初は全てが初体験で驚くことばかりでした。まず、町にモスクがたくさんあること。今までモスク自体見たことがなかったのですが、アチェには本当に町中にたくさんのモスクがあります。次に、一日に五回あるお祈りの前に町中のモスクから流れる“Azan”。初めのころはその音の大きさにとっても驚きましたが、だんだん慣れていき、毎朝5時の音でも起きなくなりました。そして、日没のマグリブのお祈りの時間にはお店が閉まること。この習慣は、最初はあまり慣れず、18時～20時前の夜ご飯時時間にお店が閉まるため、18時までに買い忘れた時は20時前まで待っていました。

女性が外を出歩くときに髪の毛を覆うためにヒジャブやジルバブを使うことは知っていましたが、女の子の友達と過ごす中で、男性の前でジルバブを取ることがどれだけ大きなことなのか理解することができました。女性がジルバブを取っている姿を見てもいいのは女性、家族、夫だけです。そのため、私もほとんど外した姿は見たことがありません。

また、イスラムでは、左手は不浄の手とされているため人に物を渡す時やお金を払うときにはすべて右手を使います。私は左利きのため、初めのころはすぐに左手が出てしまう癖を直すのに苦労しました。

このようにイスラムには、生活の中での決まり事が多くあります。ですが、イスラムの信仰が強い地域だからこそ安心して生活ができた面もあります。この6ヶ月で私が想像していたイスラムのイメージも大きく変わり、多くの学びがありました。他の留学先では経験できない唯一の文化です。学校で受ける授業以外でもたくさんの学びが得られるアチェは行くだけでも価値のある場所だと思いました。



-交通事故-

11月27日、私は人生で初めて交通事故に遭いました。車と車の事故で、私は後部座席に座っていました。事故に遭った瞬間は本当に衝撃的で頭が真っ白になりました。その車にはちょうどアチェに遊びに来ていた私のいとこも乗っていたため、私はいとこと一緒に病院に運ばれました。病院に着いてからはいとこや自分のことで不安でいっぱいでした。そんな不安な中、次々と大学の先生や関係者の方たちが病院に駆けつけてくれて私の手を握ってくれました。特にいつも一緒に過ごしている人たちは夜遅くまでそばにいてご飯を食べさせてくれたり、検査の時に車いすを押してくれたり、冗談を言って笑わせてくれたり、本当にたくさん助けてもらいました。私とその優しさに感動して泣いていると、「家族だからそばにいるのは当たり前だよ」と言い、私が寂しい思いをしないようにずっとそばにいてくれました。そして二泊三日の入院生活中は、私たちのサポートをするために常に二人は部屋に泊まって、一緒にいてくれました。昼間は授業が終わった友達がたくさんお見舞いに来てくれました。この事故は決して良いことではないですが、この経験を通して、心の底からアチェの人の心の温かさを感じることができました。



-WISMA FAMILY-

私は、この留学中に新しい家族と出会いました。WISMA FAMILY とは、私たちが滞在していたゲストハウス(WISMA ILDA)で普段一緒に過ごしていた人たちのことを言います。彼らはゲストハウスに住んでいるわけではないですが、いつもゲストハウスの中庭で一緒に過ごしていました。会って間もない時は、インドネシア語も全く話せず、コミュニケーションの取り方も分かりませんでした。また、年齢も私たちよりも上なため、よりコミュニケーションが難しかったです。しかし、少しずつ話すようになり、お互い心を許し始めてからはすぐに仲良くなれました。普段の会話にはインドネシア語に加えてアチェ語も混ざっているため、全く理解できないときもありましたがそれも踏まえてたくさん会話できたのがとても嬉しかったです。彼らとは普段一緒に ngopi(カフェに行ってお茶を飲むこと)をしたり、毎日会う約束をしているわけではないけれどみんなで中庭で何気ない会話をしたり、本当の家族のように一緒に過ごしていました。

彼らとは本当に数え切れないほどの思い出があります。Banda Aceh(車で5時間ほど行った所にある観光地)への旅行、Takengon(大きな湖がある自然豊かなキャンプ地)でのキャンプ、Ibu Sari(大学の先生)の誕生日パーティー、Bang Yasir(ゲストハウスの管理人さん)の誕生日パーティー、Bang Yasir の出産祝い、休みの日にお出かけ、毎週金曜日のフットサル、毎日の ngopi。本当に私たちを温かく受け入れてくれて家族のように接してくれました。アチェでの生活はどれもが経験したことのないことばかりで、毎日驚きと発見がありました。そんな日々を共に過ごしてくれた WISMA FAMILY のみんなには本当に感謝の気持ちでいっぱいです。



